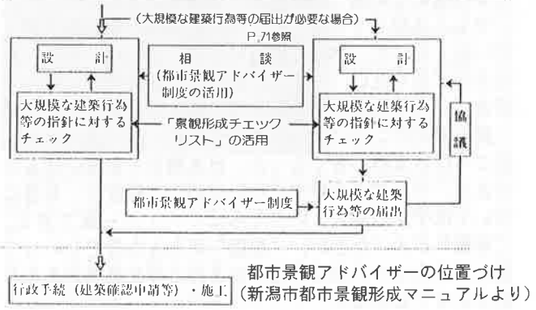
プ酒は決してやらないと。体質的にコップ酒は無理といった方が的を得ていようが、さしつ、さされつの中で、お互い会話が弾み、親しみが増してくる。これが私のお酒とのつきあい方である。

—福井工業大学・吉田純一

シリーズ 隠れた建築紹介 ～新潟市の都市景観の試み～



都市景観アドバイザーの位置づけ
（新潟市都市景観形成マニュアルより）

新潟市では、一昨年から都市計画課の中に「都市景観アドバイザー」という景観の相談窓口がおかれた。大規模な建築（1,000㎡以上）や高い看板（15m以上）等の計画を対象に、都市景観アドバイザーと計画者との検討の場がもたれて、それぞれの計画が都市景観との調和を保つ糸口を見つけようとするものである。３人のアドバイザーは、ランドスケープ・建築・色彩の専門家で構成され、プロジェクトの関係者・計画者に直接会う機会を頻繁にもちながら相談を進めていくことを、この都市景観コントロールの特色としている。年間で250以上の計画が相談されている。

これを支える都市景観条例は法的な強制力は持たず、建築確認申請の直前の相談故、それぞれの建築プログラムを大きく変えることはできない。まして、歴史ある建築を取り壊す計画を押し戻す力としては働かない。しかし、いくつかの計画では、壁面の仕上げと色、植栽の面積を増やす等の変更が付加されたり、児童が参加した壁面作成や歴史の痕跡をその一部に取り入れた計画が、実現されている。

それはあたかも、都市がもつ空間と時間の襞の中に建築を埋め戻していくもであり、都市景観という「隠れた建築」を創り上げていく行為である。僅かずつではあろうが、この試みが都市計画課の熱心な担当スタッフに支えられて、都市景観の保全と創造とのバランスがとれた質の高い環境形成に向かっていくことを期待している。

—新潟大学・西村伸也

北陸の秋・冬まつり情報

○東信菊花展(10月下旬-11月上旬)小諸市／懐古園の秋の風物詩。古城の紅葉に美しく映える菊。
○文化文政風俗絵巻行列(11/23)南木曽町／江戸時代の町人、役人、虚無僧、花嫁、飛脚などの行列。
○佐渡芸能祭(10/18-24)相川町佐渡会館／佐渡各地に伝わる芸能が一堂に集まる。
○宝徳山稲荷大社夜祭神事(11/2-3)三島郡越路町／別名ローソク祭。奉納された数万本のローソクの“畑”は壮観。
○新湊曳山祭(10/1)新湊市／曳山13本が、昼は花山車、夜は提灯山車となって町を練り廻る。
○カヤ狩り体験ツアー(10/21-22)上平村／五箇山の合掌住宅に必要なカヤ刈りを体験し、古代の生活の知恵と文化遺産を認識しよう。
○たいまつまつり(10/26、22時～深夜)黒部市／海上の安全操業を祈る夜の奇祭。参道を焦がす30本のたいまつの上を神輿が駆け抜ける。
○ほうらい祭(10/3-4)鶴来町旧市街／800年の歴史を有する金劔宮の秋季祭。「造り物」が毎年変わる。
○蓮華山大相撲(10/17)志雄町／500年の伝統を誇る。源平の古戦場のこの地で力士たちが夜まで戦う。
○'95トトリンピックin越前(10/1)越前町小樟荷捌所／福井県一の漁獲量を誇る越前漁港からの展示販売。
○'95三大朝市物産まつり(10/21-22)大野市七間通り／七間朝市の総出店と北海道三石・飛騨高山・新潟能生の物産を即売。

支部インフォメーション

■新潟支所・新潟県建築士会共催事業「親と子の建築講座」／講座３『自分自身の空間をつくる』
講師：仙田　満（東京工業大学教授）
日時：11月11日(土) 午前10時～12時
会場：新潟県立自然科学館講堂
参加対象：小学校高学年以上／定員10組(40名程度)
参加費：無料
申込方法など詳細は『建築雑誌』で紹介の予定。

■日本建築学会主催講演会「わが家の耐震対策－阪神・淡路大震災からの教訓－」
講師：加藤大介（新潟大学)、五十田博（信州大学）
日時：11月11日(土) 午後１時半～４時
会場：新潟県立科学博物館

事務局あいさつ

７月よりお世話になり何がなんだかわからないままに日が過ぎてまいりました。……が、先日の北陸支部大会にて皆様方の紹介を得ました時に初めて学会という職場が少し見えてきたように思います。

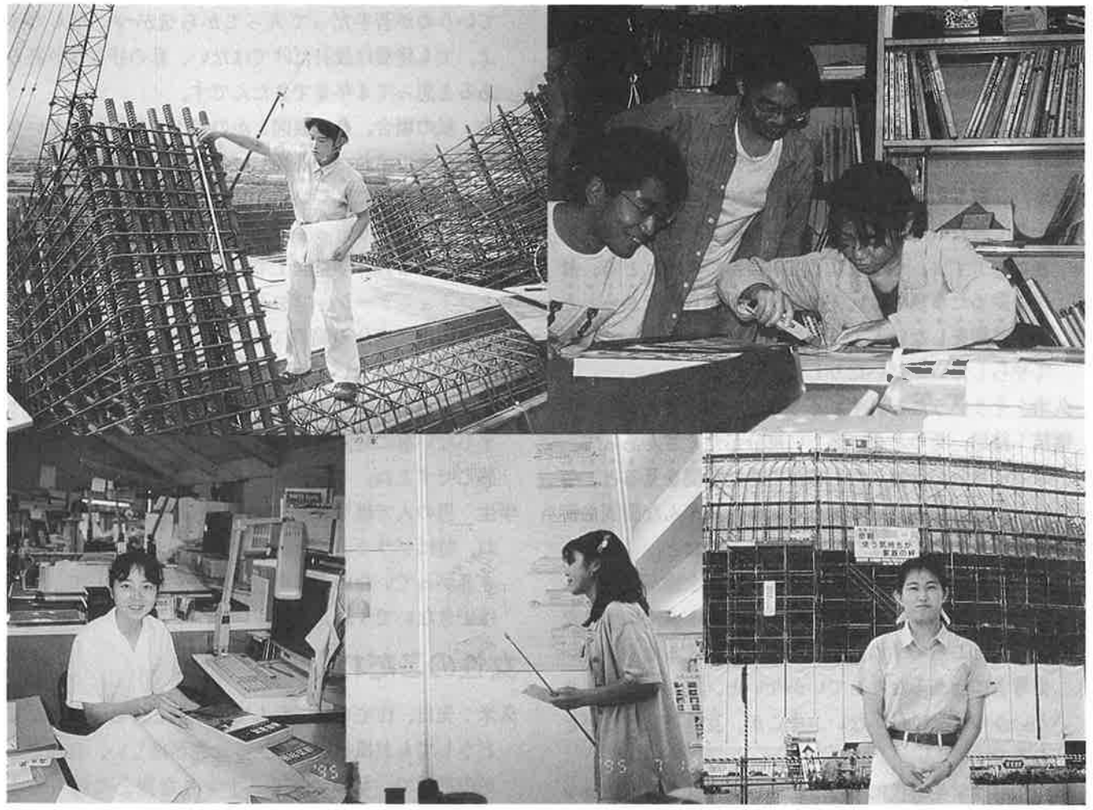
若い久保さんの後任と言うことで、少々……いえ大分戸惑いはありますが、私なりに頑張っていきたいと思います。今後共、よろしくお願い致します。

—支部事務局・瀬口さゆり

日本建築学会北陸支部ニュース「AH.!」第５号
発行日　１９９５年９月２０日
発　行　日本建築学会北陸支部広報部会
木原　隆明（新潟）　尾久　彩子（富山）
河内　浩志（石川）　増田　達男（石川）
桜井　康宏（福井）　五十田　博（長野）
事務局　室田　文男・瀬口さゆり
〒920 金沢市玉川町５－１５
TEL 0762-20-5566　FAX 0762-60-1502

AH. HOKURIKU 第５号

特集
女性が建築を選ぶとき



支部ニュース「AH.!」の第５号をお届けいたします。創刊号以来のテーマ「女性と建築」の最終話として、今回は長野の建築界で活躍される女性と女子学生合わせて８名に登場いただきました。創刊号から数えて延べ34名の女性に登場いただいたことになります。読者の中に、とりわけ圧倒的多数を占める男性読者の中に、感嘆された方、ド肝を抜かれた方、唖然とされた方等など、いろいろな「AH.!」が飛び交うきっかけになれば、編集を担当した広報部会としては大きな喜びとするところであります。ところで、この編集期間は就職戦線の期間でもありましたが、今年も女子学生にとっては相当に厳しい就職戦線であったことも事実のようであり、そのことが例年以上に気にかかるのは広報部会長のみではなさそうに思われます。

女性が建築を選ぶとき

楽しいと思うとき

久米：建築業界って男性でもすごく大変な業界だと思うんですよね。だから女性の比率が圧倒的に少ないと思うし。女性の場合、この仕事をずっと続けたいと思ったときには、あきらめなければいけないものが、いくつか出てくる。それが、大きなことでは結婚であったり、出産であったりする訳ですよね。今日集まっている方々は、学生さんは別ですけど、いまだ建築業界にいらっしゃる。ということは選択をする場面が何度かあって、建築を選んだ訳ですよね。

橋詰：実は私はやめようやめようと何度か思って、でもまだ資格も取っていないし、ここでやめたら今まで何をしてきたのかわからない、って感じで今までやってきたんですよ。今は独立しているんですけれども、最後に勤めた事務所は、**先生が「女だから男だから」という差別をしない人**で、最終的にはそこのチーフとしてやらしていただいたりして。

久米：そういうことがすごくうれしいですよね。

橋詰：結局、そのときに楽しい部分がたくさんあって、今では**自分が計画したものができた瞬間を見ると、つい1人で「にっ」って笑ってしまう**。そんな瞬間も何回かあって、やっぱり続けていこうかなと。

竹村：建築業界を選択するときに選択の余地がないなっていうのを感じるのは、結局最初から1人ではできないってところですね。やっぱり企業に入るなり、良い指導者に会えるなりしていかないと、細かいノウハウというのは身に付かない。そこが、女性には難しいところですね。

勝山：私は学生時代に事務所に通い、何回か一緒にコンペに出す作品の手伝いをしたんです。計画とか、模型とか、図面を書くとか、「こうやって建物ができていくんだな」っていうのがおもしろく感じて、続けています。

学生：建築という学科を選んだんですけれども、設計っていうのが苦手だって入ってから気がついたんですよ。でも建築は設計だけではない、私の好きな分野もあると思って4年まできたんです。

学生：私の場合、今は製図とかの提出に追われるというのがイヤですね。**一番楽しいと思うときは、できあがったものを模型にしているときなんですけれど。**

久米：模型の作り方って、先生が教えてくれるんじゃないんですよね。学生同士で情報交換したり、男子学生とコミュニケーションをとったりして。3年生までというのは、自分の範囲で試行錯誤する事に時間がかかって、いらついて、それで製図の完成が遅くなって。それが研究室に入って情報を一挙にもらって、つまらない事に時間がかからなく楽しくなったっていう感じですよね。

学生：男の人で模型にかける情熱が違う人がいますよね。特にプラモデルとか好きだった人は、図面とかできあがっていないのに模型ばかりやったりして。私にはできないですね。

女性のこだわり

久米：先日、住宅を建てたんですけれど、私と奥さんでどうしてもお風呂場には大きな窓がほしい、旦那さんが内科医で、ものすごくストレスを抱えて帰ってくる。リラックスできるのが、お風呂場だっていうわけです。でも、現場に行ったらその窓の位置が違っている。打ち放しだからどうにもならない。そしたら、

久米えみさん
（設計工房CRESS）

竹村紀久子さん
（インテリアデザイン・キッコ）

橋詰斗紫子さん
（アソシエイツ）

宮入淳子さん
（宮本忠長設計事務所）

奥さんがこの窓にはすごい思い入れがあるってだだをこねたんですよ。それを旦那さんが怒って、「たかが窓じゃないか」って、「わがままいってはいけない」って、複雑な思いがしましたね。

竹村：私も同じ経験をしているんですよ。そういうときに大事かなって思うのは、どこまでフォローがきくかってところよね。それと職人さんとのコミュニケーションって大事ですよね。

久米：女性が細かいところや情感にこだわりすぎて、大局が見えないってことがありますよね。物事をどうしても先へ進めていく社会背景っていうのがあるのに。

宮入：でも、顔を見ながら、しょうがないかなと思うときがありますよね。いちいちやり直させるのも悪いかなって思いますよ。

広報：今の現場では男性の職人さんが圧倒的に多いわけだし、みなさんは学校で学んできた過程で比較的男性の多いところにいたわけですよね。そういう意味では高校時代の友達なんかで、女子ばっかりの大学に行った人達よりは、男の人とのコミュニケーションがうまくいっていると思う。

学生：私なんか、女子ばっかりのところの方が緊張します。

女性の目と芽

久米：若い方は、上司にどんなことを求められていると思いますか。

勝山：私は今は毎日現場なんですけれど、上司には建物のできていく瞬間を肌で感じてほしいと言われているんですよ。毎日少しづつ変化していくことを、人に「こう変わったよ」って教えられるんじゃなくて、自分から気づいてほしいって。まず、見て勉強しなさいって言われています。

橋詰：若いときに出してもらえるというのは、とてもうらやましいですね。出てもいいって言われるときには、何でも全部知っていなければいけないような年齢で、「さあ、行きなさい」って言われても、実は知らないって言うことがたくさんあるんですよね。

久米：企業にとっては企業戦士をつくることが優先しがちで。でも、こんな話があるんですよ。育児休暇をとった男性が公園へ行って公園がいかに遊びにくいところかわかった、子供がつまんないところで転んでいたり、危険なところがいっぱいある。これは、子供を遊びに連れてきたことのない人間がこの公園を計画したに違いない。会社を往復するだけの人達がそういうものを企画している、って話が。そういう点では、**女性の方が蓄積してきたものがあるんじゃないか**、これから女性が必要なんじゃないかって。

竹村：女性の視点が重要だって言うのはね、すごく私は感じているんです。**キッチンなんか選んでも、これ男性の視点だねっていうことがたくさんありますよね。**

橋詰：当然、キッチンやったり、キッチンのショールームをやったりしているんですが、仕事をしている時っていうのは、台所にはほとんど立つことがないわけですね。男の人に負けないように仕事にのめり込んでいくと、女の立場の大切な面を忘れて、男性と同じような感覚で設計しているときもありますね。

ご挨拶と御礼

昨年5月の創刊以来、「AH！」の発行はその多くを広告収入によって維持されてきました。おかげをもちまして、賛助会員の増加などによる財政事情の好転もあり、今号から支部予算による事業化が可能となりました。これまで広告欄としてきたこのスペースを、今後は、賛助会員のご紹介や広報部会企画のコラム欄として活用していきたいと考えておりますが、今回は、前号までに広告の提供をいただいた皆様を改めてご紹介し、広報部会としての感謝の意に換えさせていただきます。ありがとうございました。なお、カットは、各県の県花・県木・県鳥です。

「AH！」の発行を支えていただきました。

チューリップ

ユキツバキ

トキ

新潟支所扱い
大成建設株式会社北信越支店
鹿島北陸支店
株式会社福田組
株式会社本間組
株式会社植木組
株式会社加賀田組

勝山洋海さん
（長野市役所）

板倉由美さん
（信州大学工学部）

中馬　薫さん
（信州大学工学部）

吉田貴子さん
（信州大学工学部）

広報：それぞれ職種は違うわけですけれど、女性の視点から意見を求められるようなことはありますか。

宮入：私の場合はないですね。みんな私に女性の意見を聞くのは無理と思っているのかどうかわからないですけれども。そういう面では男性のチーフと呼ばれるような方のほうが、経験豊富で知識豊かですし、その辺は個人の能力だと思いますから。

橋詰：そうやって扱ってくれる上司というのはなかなか巡り会えない。普段は「別に女性だからっていう風にはやってないよ」っていいながら、いざとなるとあきらかにっていうことがありますよね。

竹村：育ててくれる環境はいいですね。私の場合は、生活に密着した仕事が多いので女性の立場から様々なシーンでの提案ができますが、企業にいる方たちの中には受付業務的扱われ方が多くて、まだまだだなという気がしますね。

勝山：やっぱり女性っていう風に意識されてしまうことが確かにあると思うんですよ。
今いる職場には技術職の女性が１人しかいないので、女性として意見を求められたりします。

広報：学生の頃っていうのはそういうことをあまり意識しないんだと思うけど。

学生：意識というよりは、力のいる仕事で男の人の運ぶ量の半分しか運べなっかたりすると迷惑かけてるなと思います。

学生：３年生までそれほど感じなっかたんですけれど、４年になってどこかに泊まるってことになると、やっぱり女の子は別の１部屋とらなければいけないし。

学生：製図室でこもって夜遅くまでいると、男の人が「よくがんばるね」と声をかけてくれるんですよ。特別にがんばったみたいに。そういう風にいわれると特別に見られているのかなという気はします。

学生：内部だけではなく、外の人との接触とかありますよね。そのときに女性だから不安がられることとかありますか。

宮入：それは感じますけれど、それは男だから女だからという受け取り方はしないですね。入ってペーペーの何も知らないものが出ていって不安がられるのは、
男も女も同じだと思っていますから。それはもう自分の能力だと思っています。

橋詰：そういう風にとらえるのが本当だと思うんですけれど、やっぱり何年やっていてもいつもいつも不安がられるんです。若いから男も女も一緒みたいなところがあるのかもしれないけれど、10年やっててもあ、女の人だ」といわれちゃうと「えっ」って思います。今でもいわれますものね。

宮入：相手が不安というよりも、私は今は自分が一番不安ですからね。

久米：「あー女性の設計士さんか」って相手ががっかりする一部の現実がある中で、技術者としての職能を確立する女性が少しずつ増えるとうれしいですね。

竹村：そうですね、ただ女性の視点を持った男性もいらっしゃるわけですから、これからは性別ではなく能力差で評価されるように、私たちも考えていかなければいけないと思いますね。

（1995年７月収録）

「AH！」の発行を支えていただきました。

チューリップ

タテヤマスギ
（スギ）

ライチョウ

富山支所扱い
富山県住宅供給公社
北電産業株式会社一級建築士事務所
富山国際職藝学院
菱機工業株式会社
小畔建設
株式会社浪速電機工業所
有限会社春田屋ウインドー

社会人学生の旅

会社員という肩書きを持ちながら大学院に通い３年目を迎えている。

先日、北海道での建築学会に出席したついでに、所属している研究室の面々と小樽、札幌そして釧路までと足を伸ばした。長野からは上越経由フェリー利用で小樽へ上陸したが、小樽では貿易港として賑わった明治から大正時代の重厚な洋風建造物が随所に見られ、当時の小樽の繁栄ぶりを偲ぶことができた。

大会での発表を無事終え、いざ北海道北部へ。札幌では碁盤目上に整然とした道に高層ビルが林立しており、地方の大都市という印象しかなかったが、少し離れると先が見えなくなるくらい直線の続く道路や緑の絨毯を敷き詰めたような牧草地が広がる山間部があり、これまでの日本の印象とは異なっていた。山梨県出身で長野の大学にいて自然に親しんでいるはずであっても、スケールの違いには感動すら覚えた。それから釧路湿原をみて一路摩周湖へ。霧で有名な摩周湖はあいにく霧が晴れていた。屈斜路湖では雄大な湖に面した露天風呂につかり、久しぶりにのんびりとした気分を味わうことができた。その他、帰りのフェリーからの札幌の夜景も忘れられない思い出の一つだ。

短期間でしたが、楽しい旅ができた。これも私のわがままを聞いてくれた研究室の皆さんのおかげです。

―信州大学大学院／ねじ武精工㈱・市川祐一

高低温多湿地域の外壁材がほしい

新潟の気候風土に合致した外壁材料というのは一体何なんでしょうか？　私は主に、木造戸建て住宅の設計・施工に携わっておりますが、自分の不勉強もあるとは思うが、いまだに気候風土に見合った自分で納得のゆく外壁材料に出会ってはおりません。

そもそも、新潟という地域（特に長岡市以南）は夏は高温多湿、冬は積雪により外周が雪で埋もれる“低温多湿”な土地柄です。エアサイクル、高断熱高気密住宅等々の研究改良がなされ住宅性能は大変向上しました。しかし、こと外壁材に限っていうなら、一般的に窯業系又は金属系のサイディング張りの乾式工法か、モルタリ塗りや吹き付けの湿式工法が用いられています。これらはタイル張り等の外壁に比べ安価で施工性も高く“悪くない”材料ではありますが、新潟の気候風土に対して理想的なものとは言いがたい気がします。モルタルに代表される湿式工法はもちろんの事、窯業系材料ですら凍結融解の被害があるとも聞きますし、釘とコーキングで張ってある為に木下地の変形によって目地が切れたりします。金属系でも伸縮や質感に不満が残ります。

最近の住まいは、内装や設備のみならず外観、意匠にも凝りますので、いかにコストパフォーマンスに優れた材料を使うかが私たちの使命であると考えます。耐火規定等の制限もありますが、いっそ原点に返り、下見板張りとでもしましょうか。本当に“良い”外壁材って何なのでしょう。

―㈱古西屋・清水　晃

「AH！」の発行を支えていただきました。

クロユリ

アテ
（アスナロ）

イヌワシ

石川支所扱い
清水建設株式会社北陸支店
岩田修デザイン事務所
金沢工業大学
ウエイコ株式会社
鈴木建設株式会社
大和ハウス工業株式会社金沢支店
株式会社英光
丸文通商株式会社

ロシアの酒

ロシアの酒といえば“ウォッカ”ですが、まずはビールについて。ビールはお世辞にも旨いとはいえません。ウラジオストク港駅のレストランでビールを注文したのですが、泡だちもなく、コクとかキレとかとは無縁の飲物です。さて、ウォッカですが、ともかくロシア人はウォッカを良く飲みます。ロシア人のウォッカの飲み方の基本は一気飲みです。チビチビ飲んだりしません。強い刺激のウォッカは一気に喉に流し込むのが一番で、その後の酔いが訪れるを楽しみに待つというのがどうも正しい飲み方のようです。

ところで、アルコール度の高い酒ですので、日本流のエダマメのような華奢なツマミでは胃がたまりません。ウォッカの相手はサラミソーセージが一番です。サラミソーセージといっても日本で売っているような小さなものではありません。直径10cm、長さ40cm程のバカでかいヤツです。これを左手でムズと握ってほうばりながら、右手のウォッカをあおるのです。これで私の胃はかろうじてバランスがとれるのです。

なかには上質のウォッカもあります。ウラジオストクでいろいろな時間、場所でウォッカを飲んだのですが、キャバレー“ゼロニャヤ・ランパ”で飲んだヤツは比較にならないぐらい旨いものでした。たしかポーランド製のもので、それをフリーザーで冷やしてだされました。0℃以下に冷やしたウォッカはねっとりとした口触りで、一呼吸の後にすきとおったような爽やかさに変化し、喉を通っていきます。ロシアは今、社会秩序が混乱しています。切ない日々をやり過ごすために、誇り高く、心優しいロシア人ほど酒を飲むようです。

—富山県林業技術センター木材試験場・長谷川　智

私流街づくりの視点

金沢市では、平成5年から市の北部郊外で新住宅団地（瑞樹（みずき）団地）の建設を行っています。市長の一人施工による計画面積40.3ha、計画戸数約1000戸の大規模な街づくりは全国的にも初めてのケースで、注目を集めています。

わたしはこの4月から「瑞樹団地建設事務所」に配属となり、団地全体の将来像も考えながら、設計コンペで当選した木造分譲住宅の現場監理をしています。この3月までは、「まちなみ対策課」で金沢市の都市景観条例に基づく指定区域を中心とした都市景観行政に関わってきました。その内容は、指定区域が金沢の旧市街地をその主な範囲としていることから、都市の開発と保存のバランスに配慮したデザイン誘導が中心でした。すなわち、保存すべきものやデザインの基調となる既存の街並みがあり、その中で新たな計画はどうあるべきかという話が中心になっていました。

いま、市郊外の田園地帯の中に出現した更地のただ広い宅地造成地を前にして、「新たな街並みの創出」というテーマが横たわっています。金沢市の住宅団地として「金沢らしさ」という個性にこだわりながら、住む人にとって良好な居住環境を整備していくこと。ただそこには、事業として団地を完売するための視点も忘れてはならない。これらの間には互いに相反する事柄もあるが、将来、瑞樹団地が金沢市の誇る街づくりのモデル地区となることを目標にしたい。

そのスタートとなる分譲がこの秋から始まる。

—金沢市土木部瑞樹団地建設事務所・中村和宏

ゆったりとした街並とシンボル通り

「AH！」の発行を支えていただきました。

スイセン

マツ

ツグミ

福井支所扱い
サンワコン三和測量建設株式会社
カドヤ文具店
株式会社熊谷組
前田建設工業株式会社
山岸写真館
飛島建設株式会社北陸支店
㈲ワープロセンターHOPE

ところ変われば……

先日、虹を見ました。私たち日本人は当たり前のように虹を7色で描きますが、これは世界の共通認識ではないようです。アップルコンピュータの「マッキントッシュ」のマークは「リンゴ」と「虹」をモチーフにしていますが、このマークに用いられている虹は6色しかありません。「虹は6色」と認識している国もあるのです。

色の濃い瞳は淡い色の瞳よりも微妙な色彩をとらえやすく、高い感受性を備えているそうです。黒い瞳の日本人。豊かな自然、美しい色彩の国に住みながら、街に無粋な色があふれるのは何故なのでしょうか？

旅先で素敵だと思ったものが、帰って見てみるとどうも違う、ということを経験された方は多いと思います。これは地球が球体であるため太陽光が透過する大気の厚みに差が生じることが原因です。これにより、色の見え方や美しく見える色に違いが生じます。

例えば沖縄では赤、北海道では青紫が美しく見え、中部・北陸では南から黄緑、緑、青と美しく見える色が変化していきます。

「ところ変われば色変わる」のです。

伝統色や伝統配色は、その地域で美しく見える色であり、その地域らしい色と言えます。逆に、東京発信の色彩情報、大手チェーン店の看板等は、各地の風土色を消滅させ、無個性な街を造りだすものです。

人に似合う色があるように、街にも似合う色、映える色があります。これから建築や景観を考えていく上で、伝統色を用いた伝統配色による色彩計画、風土を活かした個性のある街づくりというものを考えてみたいと思います。

—㈱サンワコン・高木紀榮（たかぎのりえ）

シリーズ 北陸の酒～お酒とのつきあい～

私は家ではほとんど飲まない。せいぜい缶ビール1本。それでも顔はまっ赤になる。もちろん晩酌もなし。父はおちょこ一杯がやっとの、まったくの下戸だったし、母もビール一杯程度。アルコールには縁のない家系に育ち、生まれながらにしてお酒に弱い体質といえる。

でも人は信じてくれない。それどころか酒飲みで通っているくらいだ。飲むと陽気になり、よくはしゃぐ。量はさほど多くない（と思う）のだが、雰囲気はいたって好き。どうやらこれが災いしているようである。

飲み始めのころはビールやウイスキー派であったが、近ごろは日本酒が多くなった。日本酒だと結構いけるのである。でも甘口や辛口ぐらいがわかる程度で、お酒についてはずぶの素人、いうならばミー・ハー族である。“寒梅”が入ったとか、“黒龍”が入ったなどといって喜んでいるだけ。地元の福井にどのような銘酒があるのかさえよく知らない。

ところが、日本酒党（？）のうわさを聞きつけてか、近ごろとみに各地の一升ビンが集まってくる。今現在、研究室に並んでいるのは、新潟産が“越之寒梅”に“雪中梅”と“謙信”。福井産は“黒龍”、“華州”に“一本義”、そして“北の庄大吟匠”。石川産の“菊姫”、五合ビンではあるが、沖縄産の“泡盛”、“請福（八重山）”もある。居酒屋「純」のオープンも間近いことだろう。もちろんお客は学生たち。

ところで、話は一転するが、福井の酒で思い浮かぶのが今庄の「聖乃御代」。私がまだ東京にいたころ、恩師の平井先生が出張帰りに買ってこられたのがこの「聖乃御代」であった。先生の名前が聖（きよし）であり、「この酒は私のお酒」と、たいそう喜んでおられた。でも、これが我が福井産とはつゆ知らず。一昨年のこと、ようやく今庄の北善さんにおじゃまさせていただいたくらいである。故郷へもどって十年、暮れになるとこの「聖乃御代」は東京の先生宅に届き、年賀のお客さまにふるまわれているという。

こんなミー・ハーな私でも、ただひとつ、お酒の飲み方だけはそれなりにこだわっている。それは必ず小さなおちょこでちびり、ちびり。そして、さしす、さされつ。コッ

「AH！」の発行を支えていただきました。

リンドウ

シラカバ

ライチョウ

長野支所扱い
株式会社守谷商会
株式会社宮本忠長建築設計事務所・宮本環境デザイン研究所
株式会社後澤建築設計事務所
株式会社倉橋英太郎建築設計事務所・日本都市文化研究所
株式会社山下設計